
Re: -right-

岸理徹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Re : - r i g h t -

【Nコード】

N5728Y

【作者名】

岸理徹

【あらすじ】

これは、あつたかもしれない、遠い昔の物語。

I believe …… (前書き)

「Re:」の世界軸の物語の中では、始まりに位置する話となります。

もしあなたが、「Re:」の世界観を深く知りたいのならば、「Re: - fated -」もまた見ることをお勧めします。

E
P
I
S
O
D
E
] : . . . [I
b
e
l
i
e
v
e
] : . . . [

夜明けは近い
。

I
b
e
l
i
e
v
e
: . . .

鬱蒼とした都会の喧騒を逃れるべく、丁度このビルのエントランスに潜り込んだ時だった。一人寂しげに座る女性の姿を見かけたのは。

俺はその女性に対して特に何かをするわけでもなく、何かの意図を持ってしたわけでもなく、彼女の正面に座った。そして、お気に入りのロックバンドの音楽をイヤフォンから垂れ流した。

正面に座った女性は相変わらずの絶望的な表情をしていた。だが俺と目があつた瞬間、その表情は1000本のバラのごとき輝きになった。

「君、丁度いいわ……」

女性は何の前触れもなく席を立ち、俺の横に座り、了承もなく俺の耳からイヤフォンを抜いた。

「何か、面白い話をしてちょうだい」

彼女はそういうと、まだ話すとも言っていないのに聞く体制になった。俺はそれを無視して音楽に没頭しようとしたが、彼女はイヤフォンをつけることを許してはくれなかった。

「やれやれ……」

彼女の要求からして、俺の素情は知られているようだった。

「重たい腰を持ち上げ、俺は彼女に、俺の知っている古い古い昔話をしてやることにした。」

そう、それは昔、遠い昔の

忘れられた、物語。

そんな古い話じゃない、最近でもない話がある。それは、一国を統べる王の話だ。彼は絶対的な力と富を持ち合わせていた。そんな彼はやがて旅を終え、自分が安息できる城を作ろうと企てた。彼には勿論、必要経費など関係なかった。何せ、金は腐るほどあるからだ。そうして彼は、長い月日をかけて城を完成させた。

その城は多大なる金と人員を動員して作られたためか、それとも城の主が強かったからなのか、当時無敵の要塞とまで言われていた。その硬さはオリハルコンより硬く、その巨大さは烙燕石に匹敵する、などという伝説が残るほどだ。そしてその絶対的な強さから次第に侵略者の数も減り、もともとそういう土地に作られたためか、在来の魔ノ物も少なかった、という理由から次第と人が集まり始め、やがてその城下町の大きさもまた、世界一となった。

帝国は滅びなかった。未長く繁栄をつづけ、そして……。
「……しかし大きくなったもんだな……」
今に至るといわけだ。

街頭に溜まった蛾の群れがパタパタと光をさえぎる。それを狙うように、捕食者はじっと息をひそめる。

夜風が街をすり抜けて走る。その中をまた、黒猫は走り抜けていく。

「待て貴様！」

背後から装填音が聞こえる。それと同時に、黒猫は月の弧のように身を翻す。

「なっ……!!」

警察官は啞然とした。それは、彼女の綺麗な身のこなしのせいではない。彼女が空中で止まって見えたからだ。そして彼女が、いたって冷静にその銃口を彼らの眉間に合わせていたからである。

「さようなら、お二人さん」

夜の闇に、鳥の鳴き声が響く。

ここは世界。平和の殻につつまれた、卵のような世界。死がこの街道に舞い降りたとき、蛾が一匹、音もなく事切れた。

「怪盗ウエンティねえ……」

洋紙に書かれた依頼内容を見て、フェダーは深くため息をついた。そしてそれから、その紙で紙飛行機を作り、ベランダでふんぞり返っている少年へ飛ばした。

少年はそれを受け取り開く。開くなりげんりとした顔をして、そのまま閉じてポイと床に放り投げた。床に落ちた洋紙を拾ったクーリッジは、彼らとは違い、中身すら見ずにくずかごに捨てた。しかしそれは直ぐに、フェダーに救われた。

「決めた」彼は一人の少年の肩を叩いた。「お前が行け、レクエス」
レクエスと呼ばれた少年はこの世の混沌でも見た直後のような顔
で、その紙を渋々受け取った。

「分かりましたよ……行けばいいんでしよう、行けば」

分かれば宜しい、とフェダーは言い、依頼者の住所が書かれたメ
モと手間賃を渡し、さっさと出払わせた。

外の気温は室内で感じていたものよりもはるかに高く、同時に言
いようのない倦怠感を俺にもたらした。そしてその倦怠感は一なる
悪循環を生み、余計な購買欲までかき立たせた。

出店で買ったアイスクリームを適当に食らいつきつつ、住所の番
地へ向かって歩く。それほど遠くない距離のはずだが、どうにも遠
く感じるのは前述のせいか。

「やあ、少年」顔見知りの八百屋がこちらに気づいた。「今日も暑
いな」

「全くです」俺は店頭に置かれたアイスボックスに手を浸し、既に
暇となった逆の手で汗をぬぐう。

店内の奥に見える温度計は34 を指していた。道理で暑いのも
納得がいく。

与太話もほどほどに俺は店を出発し、4ブロック先の、目的地へ
と足を運んだ。辿り着くまではやたら長く感じたが、辿り着いてみ
れば、その達成感の無さと言ったら地獄絵図に匹敵する。

インターフォンを押す。タイピング音にも似たりズムが鳴り、や

がて扉は開いた。中から出てきたのは、こちら辺では見たことのない女性だった。引越してきたばかりなのだろうか、玄関の外側から見た室内はどうにも散らかって見える。

「ああ、これはこれは」彼女は一目見て俺が何の目的で来たかを理解したようだった。「どうぞ、中へ」

「失礼します」

一歩ステップを上がり、中へと入る。室内は散乱している、と言うよりは、段ボールが積み重なっているだけで、むしろ閑散としていた。特に居間の端に積み上げられた段ボールは4段重ねにもなっていた。

彼女は椅子に座らせると、紅茶を差し出した。俺はそれを一口飲み、耳を傾けた。

「先日、例の怪盗に大切な物を盗まれてしまったんです」

うつむき加減に話す彼女の顔つきは豪く悲しげな物があった。よほど大切な物が盗まれたのだろう。

「それを、取り返してください」

「つまり、怪盗を捕まえろと？」

彼女は神秘的な顔つきのまま頷いた。

「警察でも捕まえられないぐらいですからね」予想以上に絶品だった紅茶を更に一口、口に運ぶ。「一個人が捕まえるとなると、余計難しくなりますが？」

俺の言葉に彼女は、それでもよろしくお願ひします、と頑なに依頼の撤回を拒んだ。そうなれば弱いのはギルドの方で、断ることは難しい。いや、できなくはないが、信頼をどん底まで落としかねない。

勿論それは俺たちのギルドにも言える。

「……分かりました」

ただし、と付け加える。

「成功は保証できませんが、構いませんか？」

彼女は頷いた。それから、簡易的な“契約の儀”^{けいやくぎ}を行い、正式に

依頼を受領することとなった。その際知ったが、彼女の名前は『アネラス』リパーテッド』とか言うらしい。どうでもいいことだが。

アネラスさんは去り際に紅茶を二パックほど俺に持たせ、笑顔でサヨナラと手を振った。俺もとりあえず、手を振り返すことにした。そのまま寄り道せず、一度ギルドに真っ直ぐ帰ると、フェダーは何しに戻ってきたんだと言いたげな目つきで俺をにらんできた。だから、紅茶を一パック放り投げてやった。

「ふむ、紅茶は美味いな。なかなかの成果だ」

真昼間のつまらないテレビ番組を眺めていると、厨房からティーカップを携えたフェダーが現れた。

「右手の人差し指に指輪をつけた女性の作る紅茶は美味いつて都市伝説は、本当らしいな」

くだらない冗談をくだらなく笑う彼は、平和の象徴とでも言うべきぐらい、暇に見える。ところが、その日はそのままくたたく終わず、突然真面目な顔つきに変化した。

「それより、お前に伝えとかなきゃならない連絡事項が一つある」時々フェダーという男は真面目になるが、彼が真面目になるときは重要事項か意味のある話しかないという特徴がある。俺は最初話半分に聞くつもりだったが、黒くなったテレビ画面を見て、真剣に耳を傾けた。

彼は先ほど手に入ったという、騎士団内での不穏な動きについて色々と情報を俺に提供してくれた。その話が信憑性のあるものなのかどうかは不明だが、この情報を持つギルド達はみな、各々対策を取り始めたらしい。あるギルドは騎士団とのかかわりを一時的に断ち、あるギルドは騎士団上層部と繋がりを更に強めたそうだ。

この先面倒事しか見えなくなってきたな、と考えると、依頼の遂行が極端に嫌になってきた。が、いまさら投げ出すわけにもいかない。

「まあ、大変だが、お前の力を信じてるよ、レクエス」ぼんと肩を叩かれた。

俺が、人の期待を背負うことが、どういふことなのか彼は知っているであろうに。

彼はそれから再び紅茶の香りに勤しみ始め、とうとう一人残された俺は居てもすることも無いので、自宅への帰路へ着くことにした。明日はここには来ないだろう。早朝から聞き込みをしなくては。

沈む夕日に向かって、俺は一つ、ゆっくりと伸びた。

その日の夜、夕食すら家に残っていないことに気づき、少し遠くなるが中心部にある大型ショッピングセンターへと買い出しに出かけた時だった。

「……………」

突然グイと引っ張られ、何かと振り返ると、見知らぬ少女が飢えた目つきで袖を引っ張っていた。

「……………」

「は？」

「ご飯、頂戴……………」

そう言っただけ少女は、ドイツシユウウォーターブロードより少し明るいぐらいの瞳をこちらに向け、うるうる涙を瞼に溜まらせた。当然俺は無視しようとしたが、先に行こうとするたびに袖を強く引っ張られた。

「ったく、しつこい！」

強く腕を払うと、少女はバランスを崩して地面に転んだ。その時

に丁度スカートから太ももが露呈した部分を、見た。
だがそれは、萌えの要素などとはかけ離れた、禍々しいものだった。

「お前、それ……」

少女はハツとしてスカートを下げ、無言でその場から去って行った。それも妙に慌てた様子で。

俺は彼女を追いはせず、その後姿だけを眼に強く焼きつけた。もしかすると、彼女とはまた会うことになるかもしれない予感が、うつすらとしたからだ。

そしてその予感は、出店で売られている焼き鳥の匂いによって次第と記憶の隅に追いやられ、しまいには醤油のにおいに包まれ紛れて、どこにあるかすら分からなくなった。

NEXT DAY

強くノックする音で、その日は目覚めた。扉が乱雑にたたかれる音は心地の良いものではない。

寝ぼけ眼で扉をあけると、そこにいたのは昨日の銀髪だった。今度は何やら抱えているが……寝袋？

「ご飯、食べさせてくれるまで帰らない」

彼女は相変わらずの服装でズカズカと部屋に上がりこんだ。あがりこんだと思ったら、何の躊躇もなく冷蔵庫をあさり始めた。

「あ、卵……」

少女は感激の眼差しで卵をしばらく見てから、何を思ったかそれ

を俺に渡しに来て、頼む立場の分際で、焼けと命令してきた。

俺は仕方がなくその卵をフライパンの上にあけ、程よく焼けたところで皿によそる。それを今のテーブルの上に載せ、白米の盛られた茶碗を二つ、対称の位置に置いた。

「あ……！」

なんでそこまで？　と思うほど彼女は喜びの声をあげ、一口、一口とまた口の中へ入れていく。やがて彼女の目の前に置かれたディナー達は跡かたもなく消え去った。しかし彼女は満足など到底していないらしく、更なる要求を迫ってきた。

「いい加減にしとけ。それ以上食いたくば、働くことだな」

俺は同じく空になった茶碗と皿を、彼女のごと運んで流し場に置いた。彼女は未練の詰まった瞳で俺と、茶碗を見据えていたが、やがて諦め、机に突っ伏した。

「お前、名前は？」

少女は顔もあげず、ただ『アリス』とだけ名乗った。

「じゃあアリス、お前俺を手伝え」

彼女は何も答えない。ひよっとして寝たのか？　と違って、近場にあつた調味料のふたを開くと、目にもとまらぬ速さで顔をあげた。その瞳はやはり、光り輝いている。

「勿論バイト代も払ってやる。どうだ？」

アリスは一瞬躊躇いを見せたが、俺が調味料の蓋をパカパカ開閉してみせると、その行為のどこに魔力があるのかは理解しがたいが、とにかく頷いた。

よし、と俺は立ちあがり、昨日の道具一式を手に持ち、アリスの手を引いて家を飛び出した。

「で、どこ行くの？」

俺の本拠地はアパートの203号室だが、そこを出てすぐの階段ホームグラウンドを降りながら、アリスは当然の疑問を口にした。俺は笑顔で、当てはないと答える。

アリスはそんな無計画性を機にはしていないようで、そうなんだ

「と気の緩むような相槌を打って、黙々と俺の隣を歩き始めた。
「……なあ」

市の中心部へと続く道を歩いている途中、気になってしようがなかった、このくそ暑い中でもそのくそ暑そうなゴスロリ調の強い服を着ている理由について訊いてみた。が、彼女は涼しい顔で、「特に理由はないです」とだけ答えた。

こいつの感温帯はぶっ壊れているのだろうかとも思ったが、あながち間違っただけでなさそう、色々と恐ろしいの。大体、人の家に堂々と上がりこんで飯をタダ食いしていく時点で只者ではないのは明らかだし、それにこいつを見ていると俺の常識が捻じ曲げられそう（実際には既に捻じ曲げられているが）、怖くなってくる。

そんな俺の勝手な心配をよそに、彼女はやけに楽しそうに街を眺め歩いていった。

「ひよつとして、ここは始めての土地なのか？」

アリスはコクリと頷いた。じゃどうやって来たんだこいつ……！

まさか、ストーキングか？

「つかお前、何処に住んでんだ」俺の真剣な問いに、彼女はあらぬ方向を指さして、あっちとだけ答えた。

指さされた方はどう見ても住宅街のある方向ではないのだが、そこは置いておいた。こいつが工場生産された人形だとか言われても何の違和感も持たずに「だろうな」と答える自信が、今の俺にはある。

そんなこんなで楽しくも奇妙な俺たちの初の旅路も、昼ごろになった時には終わっていた。理由は簡単で、聞き込みをしても結局誰も知らないとしたか答えないからだ。流石プロ。証拠の一つも残さない。

ただ、一つだけ有力な手掛かりを得ることができた。それは、ここら辺じゃそれなりに有名な宝石店“ジュエリーフィッシュ”の最高級品である、“魚群宝石”が店内で盗まれた時に落ちていた、“犯行声明文”だった。俺たちはその声明文を借してもらい、それが

誰によって書かれたものなのかを突き止める段階へと突入した。

この段階は通常では相当骨の折れることだが、俺の知り合いにこういうジャンルのプロフェッショナルがいる。彼に頼めば、一瞬で見つけてくれるに違いない。俺はそう確信した。

勿論その確信は一片の狂いもなく、紛れもなくプロの力により現実となったが……、一つ問題が生じた。それは……。

「こいつ誰だよ……」

全く聞いたこともない名前が、メモ用紙には記入されていた。

「仕方がないだろ、そうやって出たんだからさ、現実に」

確かにその通りだが、これではどうしようもない。

「なんとかならないのか？」彼は唸りをあげ、知恵を懸命に絞りだす。しばしの沈黙の後、彼の口は開かれた。

4回ほど唸り声が上がった後、彼は何かを思い出し、しかしそれと同時にげんなりとした顔を浮かべた。

「どうしたんですか？」

「あ、いやあな……、一人……当てになるかは分からないが、騎士団に知り合いがいてな」男は煙草の煙を吐いた。「そいつに頼めば、街の住民リストを見せてくれるかもしれない」

「その人の名前は？」藁にもすがるように、名前を尋ねる。

「ルクシエ。ルクシエ」ハルバード「煙草の煙が天へと昇っていく。蒼十字騎士団の中尉だ。全くそれっぽくは見えないがな」

中尉、という言葉が鼓膜を通過したのと、フェダーの言葉が脳裏をよぎったのは、ほぼ同時の出来事だった。

「……騎士団か、まずいな……」フェダーの情報が正しければ、今接触するのは危険極まりない。

だが、ルクシエという人物しか、頼れる人間が居ないのも確かだった。騎士団を役職に持つ知り合いはいにく持ち合わせていないし、ギルド内部でもそこそこ権力の強い人間と知り合いだという奴はいなかった記憶がある。

これはレクター（各ギルドの代表）であるフェダーの意見を仰ぎ

見るしかない。そう決断し、彼の家を去った。帰り際に、絶品だという紅茶を差し入れにどうかと言われたが、丁重にお断りした。

ギルドは相変わらず暇が充満していた。この空間に慣れてしまっている自分にゾツとしてくる。だが事実、この手の空気は気味の悪いものではない。

「お、どうしたその子は」ロリコンっぽい男？1、フェダーがアリスに反応を示した。「ナンパか？」
「違いますよ」

あいにく冗談に付き合ってるほど暇ではないので、単刀直入に本題を切り出す。フェダーも事の重大さを理解したようで、真剣に考え始めた。

「思うに……確信はないのだが……」フェダーが苦渋の声を上げる。
「……その騎士団であれば、おそらくは大丈夫だろう……」
ただし、とフェダーは続ける。

「“ルシフェル”と名の付く単語には要注意してくれ」
「どうしてですか？」

「どうにも、その反逆者たちが自分たちのことを呼ぶ際、“ルシフェル”と名乗っているらしいんだ」

彼はどうにも自信なさげに説明した。無理もない。本当に反逆を起こそうならば、それはもう大惨事では済まない領域の話となってくる。

この街は烙燕石を抱えている街だ。もしこの街が悪の手に渡れば、この世界ごとめちやくちやになることだってありうるかもしれない。そういった意味でも、この街が平和であることは世界が平和であるとイコールで結んで構わない。

「アリス、お前俺以外にもどうせいろんな人に飯要求してたんだろ？」

アリスはうんと頷いた。前に騎士団の人にお世話になったことがある、と彼女は白状した。

「その人の名前は？」

「うんと、確か……苗字はリパーテッドだつてのは覚えてるんだけど……」

リパーテッドと聞いて、ある人物が浮かんだ。

「なるほど……」思わず笑みがこぼれる。フェダーが心配そうな顔をしたので、直ぐに真顔に直す。

「面白い事になってきましたよ、これは」

一人笑う俺を尻目に、二人はぼかんと口を開けたままだった……。俺はそんな二人を置き去りに、そそくさとギルドを飛び出す。アリスは慌てて付いてきたが、フェダーは付いてこなかった。彼はなんだかんだで理解の早い男だ。もしかしたら寸前でほほ笑みの意味を理解したのかもしれない。

そして俺は、ただ一つの目的を目指した。今日みたいな日に限つては、日の沈んだ街を駆けるというのもたまには悪くないものだと感じられた。揺れる黒髪と輝く銀髪が夜闇を過ぎ、群れる黒猫もその行脚に目を傾ける。

煤けた茶色に南瓜色が目立つ家の呼び鈴を鳴らすと、中から見知った顔が現れた。

「あら、あなたは……」女性は驚いた顔を見せた。無理も無い、こんな時間に呼び鈴を鳴らすのは犯罪者か不審者ぐらいだ。

「やあ、マダム」適当な言葉をぶつける。「いや、お嬢さんかな？」そんなことはどうでもいい、と勝手に言葉を続ける。

「あなたの身内に騎士団の方がいませんか？」

「……騎士団？」彼女は心当たりが無いわけではない顔をする。これはどうやら図星らしい。

「そのお方、ご紹介いただけませんか？」

「……はあ、まあ、いいですけど……」

どうかしたんですか？ と彼女が心配そうに言ったので、俺は笑顔で「心配後無用ですよ」と返した。

彼女はそれから俺たちを屋内へ招き、彼と連絡を取るから待っていて、と受話器をとった。その間、居間で静かに待機する。針が20ほど下に傾いた時、彼女はようやくやく現れた。

「すぐ来てくれるそうよ、家の弟」

「そうですか、助かります」

アリスは依然として真意を読めていないようだが、こちらは準備満タンだ。一片のほころびも無い。

「ところで、調査の方はどうなってますか？」彼女は期待に満ちた眼差しを俺に向けた。

「まあ、ぼちぼちですかね」

「そうですか……あ、もしかして」

「……何でしょうか？」

「今回のこれもその一環だったりするんですか？」

彼女の素晴らしい推理能力に拍手を送る。

「まあ、そんなところですかね」

と、呼び鈴もなしに玄関の戸が開いた。見ると、騎士の正装に身を包んだ少年が立っていた。

「……姉さん、この人たちは……？」

柄に手をかけた状態で、少年はアネラスさんに問いただした。彼女は笑顔たっぷりに、少年に事情を説明した。

どうにも、この男が例の人物らしい、ということはすぐに分かったが……。

「あんだ、どこの所属？ 蒼の関係者か？」

少年は首を横に振り、紅あかだと答えた。

「んじゃあ、次の質問」自己紹介も挟まずに、とんとん拍子に話を進めていく。「ルシフェルって単語は知ってるか？」

少年は生真面目に、その言葉について色々と記憶を手繰ったらし

いが、結局分からなかったようで、これまた首を横に振った。

「それじゃあ、最後に、ルクシエって奴知ってるか？」

今度こそ、少年は首を縦に振った。彼曰く、その人物は彼の上官らしい。

「なら丁度いい。そいつの所まで案内してくれ」

「ちよつと待った。知らない人間を簡単には連れて行けない」

幼稚園児の教わる防衛原則みたいなことを馬鹿丁寧にぬかすあたり、こいつはよほどの岩石野郎らしい。この状況下において、その特性ほど厄介な物はない。例えるなら、ゴキブリにステルス迷彩を渡すのと同じレベルだ。

あいにく堅苦しい手続きに付き合ってるほど暇ではないし、そもそも連れ歩いている孤児はもうそろそろ寝る時間だ。子供が起きていいのは上限25時と言うのが世界の常識だ。

「悪いね、俺は子連れなんだ」ポン、とアリスの頭に手を乗せる。

「こんな時間だしとつととしてくれないと困る。それとも……」

「それとも？」

「あるうことに、騎士団の騎士様がこんな幼い子供のお願ひも聞けないというのなら……」

少年はアリスを見た。それから約5秒後、少年は無理だと答えた。

「だいたいこの子、どう見ても10歳以下には見えない」

「ロリコン趣味でもあんのか？」

「ロ、ロリコン……！？」

「悪いが、今はお前の趣味もこいつの年齢もどうでもいいってこつた！」

一瞬の隙を見て、少年の懐刀を奪い取った。少年は驚きと同時に俺から剣を取り返そうと手を伸ばしたが、俺はそれを払いのけた。

「さあて取引の時間だ」丸腰の少年に剣の刃を向ける。アネラスさんが抜刀に驚いて腰を抜かしたが、気にしない。「俺を連れていくか、ここで二人とも殺られるか」

こつという状況下では、生真面目な性格は俺にとってプラスとなる。

騎士様つてのは民間人最優先をモットーとして（本当に全員それを心得ているかは微妙な所ではあるが）、教育を施されている。当然こいつは岩石野郎だから、そのモットーには逆らえない。

そして案の定、彼は俺の要求を呑んだ。

「んじゃ、今さっそく連れて行け」

「今いつでも誰もいないが……いいのか？」

「構わん」

少年を先頭にして、家を出る。アネラスさんがわざわざ玄関までついてきたが、外まではこなかった。

再び出た外の空気は相変わらずの物だった。濁りなく黄色い満月に照らされて影が浮かび上がった3つの影が、物言わぬ街を往く。

「所でだ」肝心なことを聞いていなかったのを思い出し、闊歩する少年に問う。「お前の名前は？」

「私は、フィンガード＝リパーテッドだ。フィルと呼んでくれればいい。」

それで、と彼は切り返した。

「君の名前は何だ」

「俺の名前はヒューイ。で、こいつは」

「そいつの名前は知っているからいい」

アリスは、眠たそうな眼をこちらに向けた。

「ああ、なんでもないよ」打って変わって赤子をあやすかのように優しい口調に彼はなった。が、俺がそれを白眼で見ているのに気付いたのか、すぐにこちらに向きなおした。

その後は特に会話もなく、閑散とした夜道をただひたすらに歩いた。途中でアリスがダウンし俺がおんぶする形となったが、意外と軽くてそれほど体力は消耗しなかった。

首都西街道3丁目に着いた時、ようやく目的の建造物の前までやってきた。フィルは持っている扉の鍵で扉を開け、俺たちを中に招き入れた。やはりというか、中には誰もいなかった。

「道の途中で言ったが、ルクシエ上官の家の場所は流石に知らない。

そこは自分で探してくれ」

フィンはそう言つて、珈琲は飲むかどうか俺に尋ねた。俺はブラツクを注文し、彼が厨房で珈琲を入れていた間、アリスに毛布をかけてソファの上に寝かせた。

「あんたは寝ないのか？」厨房から声がする。

「ああ。俺は寝なくても大丈夫な男だからな」実際、俺は1週間なら不眠でも行動できる自信がある。

「へえ、そうかい」

自分で尋ねておきながらそっけない受け答えとは騎士道に反するのではないか、と思つたが、厨房から流れてきた珈琲の香りのせいで、口に出すのが億劫になつてしまつた。

ブラツクの苦い香りが鼻を刺激する。それなりに匂いをたしなんだから、一口だけ飲んですぐに机に置いた。フィンは、砂糖を二つ入れ、十分に溶かしてから口に運ぶ。

会話の無い沈黙がしばし流れたが、居心地の悪い沈黙ではなかつた。というのも、この支局にはどういふわけか本が沢山あり、そのいくつかは俺の興味を惹くものもあつた。フィンは俺が本を読むことを了承し、また彼も読書に耽つた。満月の夜には読書が捗るとか言われているが、そのせいかもしれない。

時計が北東を指したとき、フィンは本を閉じ、ソファから立ち上がった。

「私はそろそろ帰る。君は……まあ当然そこにいるのだろう」

「んー、まあそうだろうなあ……」

適当に返す。フィンは迷惑な来客のため息を一つついてから、ゆつくりと扉を開け外に消えていった。残された俺とアリスは、深々刻々と流れていく時間の中に身を置いた。

それから幾許かの時が流れ、鳥が鳴き始める刻限に、少女は目を覚ました。それは、施設の扉が開かれるのとほぼ同時のことであつた。

「お、お前ら誰だ!？」

これまた真面目そうな騎士がご入場なされた。彼は突如出現した不審者を見て、当然のようによるけ驚き、しりもちをついた。

彼は 彼で無くともそうするだろうが 剣を鞘から抜いた。刃が抜かれるのと、レクエスが飛び出したのはほぼ同時のことだった。一瞬の間隙の後、騎士が構えた刃は高く天井に突き刺さった。「悪いね、あんたを傷つけるつもりは無い」紳士的スマイルをかます。「しばらく黙っててくれりゃ十分だよ」

鈍い音と共に、騎士は床に倒れた。装備品を根こそぎ掻っ攫い、真っ裸の状態にして樽桶の中に突っ込んでおいた。勿論、口と手にはお決まりのガムテープ付きだ。

「かわいそうに……」アリスが捨て猫を見るような眼で樽桶を見た。悪影響を生まないように、目を手で隠してあげる。

「さてと、お次は本命かな？」

半開きになった扉を見つめる。そして、その時は直ぐに訪れた。

「おいおい、朝から襲撃事件か？ 止めてくれよ……」

蒼のエンブレムを箆手につけた、騎士団には似つかわしくないほどだらけた男がのそつと入ってきた。男は俺たちを確かに視界に捕らえたが、何事もなかったかのように厨房へと消えた。

「もしかして……、あんたがルクシエか？」

厨房から、肯定する返事が聞こえてきた。

「あんたに聞きたいことがあってな、ちょっといいか？」

彼は無精髭を蓄えた顔をこちらに向け、面倒くさそうにソファに腰掛けた。俺とアリスはその反対側に座る。

俺はこれまでの事情を説明し、改めて住民リストを見せてくれるよう依頼した。すると彼は、意外にもあっさりと許可をくれた。

「騎士団もその事件には頭を抱えていてな」休日のおっさんにしか見えない姿の男は、水をグビツと一気に飲み干す。「……ツハア！

……ギルドの方で解決してくれることほど有難いものは無い」

「そうですか」早速住民リストに目をやる。この近辺に住む住民の名前がずらつと書かれている。

「ところでだ、こんなものを見せてくれるよう頼みに来たってことは、犯人の名前が分かったのか？」

「“履歴読み”のおかげで助かりましたよ」

「ああ、あいつか……」なんだ、と何故か残念そうな声。「あいつもたまには役に立つものだな」

あんたよりかな、と言いたい衝動を冷静に抑える。まあ、この人なら言っても問題なさそうだが、念のために言わないでおこう。

そんなことより、と住民リストを隅から隅まで見て回る。人口一千万人と超巨大都市であるこの都市で、ただ一人の名前を見つけないのは容易ではない。結局この後、日暮れごろまで照合は続いたが、結局見つからなかった。

「お前一人では骨が折れるだろう。騎士団も是非手伝わせてくれ」ルクシエはそういつてメモ用紙を取り出した。俺は履歴読みバックナンバーに聞いた犯人と思われる人物の名前を言う。

「了解した。」メモ用紙が彼のポケットにねじ込まれる。「それじゃあな、少年」

ルクシエに感謝と別れの言葉を告げ、アリスと共に帰路に着いた。そういえばコイツは今夜は何処に泊まるつもりなのか。

「お前、どこに泊まるんだ？ 今日」

銀髪の瞳が俺の瞳を見る。

「え、決まってるでしょ、えへへ」確実に何かを企んでいる表情。

やばい、と思っただが、彼女の口は止まらなかった。「お兄ちゃんの家が決まってるでしょ！」

さも当たり前のように、堂々と街の中心で抱きつかれた。こうなれば弱いのは俺の方である。突き放せば白状者。受け入れればロリコン確定だ。

「あーはいはい、分かったよ」俺はロリコンの称号だけは頂きたくない。「ただし、条件がある。」

かといって突き放すのも気が引け、交換条件を提示した。

「俺はお前を雑用同然に扱おうが、それを拒まないなら良いだろう、

泊まると良い」

アリスは雑用、という言葉に一瞬眉をひそめたが、結局笑顔で快諾した。というか、泊まるならそれぐらいはするのが当然だと思っ
が。

そんなことはお構いなしに、ルンルン気分でアリスはそそくさと先へ行ってしまった。置いてかれた俺は急いで彼女を追う。

その時だった。黒い影が、俺の頭上を飛び越えた。それと同時に、それが泥棒だと気づかせる言葉が耳に飛び込んできた。

「待て！」反射的に俺は叫んでいた。「お前が怪盗ウエンティか！
その言葉にそいつは振り返った。服装はマントに包まれていて明確には分らないが、顔は明らかに男性のものだ。

「お前は……ッ！」

一度の跳躍で一氣に間を詰める。マントのすそを掴み、思い切り建物の壁に向かって怪盗を投げつけた。しかし怪盗は、壁にぶつか
るであろう直前で、突如消えた。

「なかなか強い奴だ。だがあいにく、相手をしている時間はないの
でな」

風が激しく吹き始める。風の移動呪文、“ビエント”の発動の予兆だ。

俺はポケットからナイフを取り出し、鞘を抜いてから怪盗に向か
って一直線に投げた。綺麗な回転運動をしながらナイフは飛んで行
き、怪盗と一緒に消え去った。消えると同時に、風もやんだ。

「おい、あんた！ 怪盗はどうなった！」

屋根の上に呆然と立つ俺を呼ぶ声が、下から聞こえる。

「いなくなった。で、盗まれたものは？」

屋根から飛び降り、男性に尋ねてみた。その男性によると、盗ま
れたのはどうやら杯だそうだ。名前は……。

「紅瑠璃杯”っていう、和国からの贈り物だ」

紅瑠璃杯、と言われても全く分からないが、とてつもなく重要な
ものであるのは確からしい。となれば、間違いなく騎士団が動き出

すに違いない。

「あんた、何処の人だ？」

「私は王立博物館の店長をやってる、大西耕平だ。なんだ、あいつを捕まえてくれるのか？」

「既にそういう作戦中だ」

俺はポケットから名刺入れを取り出し、名刺を一枚大西に差し出した。

「何かあれば連絡をくれ。それじゃあ」

乱雑に別れを告げ、自宅方面へ走り出した。今夜は徹夜を覚悟しなければならなそうだ。

自宅の前にはアリスが突っ立っていた。物寂しそうに月を憂いている。だがこちらの存在に気づき、その表情は怒りに変わった。

「遅い！」

「悪い。だが、事情が変わった。直ぐ出かけるぞ」

アリスは首を振り、駄々をこねた。こういう時に子供モードは迷惑極まりない。何とかして動いてもらわないと、機を逃す。

その時、俺はおととい見たチラシに、有名ハンバーグチェーン店の安売りチラシが入っていたことを思い出した。

「分かった。今辛抱すれば、“フードパッション”に連れて行ってやる」

実に扱いやすい奴だ。脱帽せざるを得ない。

先ほどまでご立腹だった面影は見えず、楽しそうにリズムを刻みながら歩いている。

そんなこんなのうち、目的地へと着いた。場所は、依頼者の家。「どうしてここに来たの？」

「ちよっと確かめたいことがあってな」

インターフォンを鳴らす。が、出ない。どうやら留守のようだ。

「乙女がこんな夜中に外出とは、あまり感心しないね」

俺はゆっくりと、ドアノブに手をかけ、ほんの少しだけ力を入れた。するとたちまちドアノブは消え去り、静かに扉が開いた。

「それどういふ手品？」不思議そうな面持ちでアリスがドアノブがあつた場所を見る。

「現代にありがちな、安易な手品さ」

アリスが中に入ったことを確認すると、指を鳴らした。元に戻るように、願いを込めて。

部屋の中は閑散としていたが、前来た時とは明らかに異なる部分があつた。それは……。

「段ボールが一つだけ消えてるな」

居間の隅にあつた段ボールがいつの間にか三段になっていた。どうやら一つは開封したか、移動したらしい。

ポケットライトの灯りを壁掛け時計に向けた。時刻は既に七色を越えていた。もうそろそろ夜中のおやつの時間になりそうだ。

「さて、そろそろだ」俺はカーテンの隙間から外をのぞいた。案の定、風が強くなつてきている。

「あ、人が出てきた！」その時、アリスが小さく声をあげた。

彼女の視線の先には……。

「アネラス、やはりあいつが怪盗の正体だ」

その証拠に、彼女の右腕にはナイフが深々と刺さっていた。

俺は彼女が確かに玄関までやってくるのを確認してから、玄関から死角となる位置でじつと彼女を待った。そしてやはり、彼女は中に入ってきて、居間の灯りをつけてから腕のナイフを抜いた。

「くそ……やられた……」

覆面とマントを脱ぎ去り、その場にへたり込んだ。

「救急箱、お貸ししましょうか？」

背後から声をかける。彼女はその言葉に普通に返事をしたが、すぐに侵入者だと気づいて飛びのいた。更に、そこに立つのが俺自身

であることに気づいて倍驚いた。

「やあ、こんばんは」敢えて笑顔で話しかける。「夜の散歩は何かでしたか？」

彼女はとっさに手元にあったナイフを俺に投げつけた。俺はそれを手で払いのける。

「やれやれ、危うくだまされるところでした」

「……どうやって気付いたの？」

「簡単です。右手の人差指につけられた指輪ですよ」

彼女は言われて自分の右手の人差し指を見た。右手の人差し指のある一か所が、丁度よく膨らんでいる。

「あの一瞬で……」

「観察眼は人一倍強いと自負してます」

彼女は観念したかのように、その場にうずくまった。俺は黙って、彼女の腕の止血を手伝った。

しばらく彼女は沈黙を続けていたが、夜が明け始めたころ、その重たい口を開いた。

「……頼まれたんです、騎士団に」

「弟を盾にして？」

「コクリ、と彼女は頷いた。」

「彼らは私に、盗賊となつて街に騒動を起こせと言ってきました」
最初の無差別的な窃盗はおそらくこの命令によるものだ、と安易に推測できた。

「そして昨日になって、彼らは突然、私にあるものを盗めと言ってきたんです」

「へにるりのつぎ紅瑠璃杯か」

はい、と彼女は呟いた。どうやら俺たちが来た時に家にいなかったのは、途中それを依頼者に渡していたかららしい。

「で、こんどは？」おそらくこの問いの返答次第で、事件の裏は見えてくるはずだ。

「何も依頼されませんでした」彼女は寂しそうにうつむいた。「私は用済みなのでしょうか？」

俺は答えない。だが、答えは見えた。

彼女は間違いなく仕事をした。しかしこれは確かに“騒ぎを起こさせるため”ではあるが、単に民衆をざわつかせるのが目的ではない。

「ルシフェル」彼女はハツとして顔をあげた。「やはり、お前は知っているな」

簡単に説明すれば、彼女にこの依頼を頼んだのは“ルシフェル”の連中だ。“ルシフェル”のリーダーか誰かが騎士団内の団員のネットワークを利用して彼女を見つけ、怪盗になるように脅した。彼女は脅され仕方がなく怪盗になり、地域地域で盗みを働いた。怪盗のニュースが話題になり始め各所でそのことに対する都民の関心を惹きつけ、裏で動くスペースを作った。そしてそのスペースを完成させた今、彼女に国宝級の宝物であるあの杯を盗ませる。するとどうなるか。このままでは王の面子は丸潰れとなり、当然搜索や次なる犯罪の防止に否が応にも兵士を使わざるを得なくなる。そうなる と必然的に帝都中心部の警備が今よりも手薄になり、帝都全体に丁度よく兵力が分散される。こうなれば“ルシフェル”の思惑通り、帝都を奇襲しアーサー王の首を取ればよい。

この念密に組み立てられた計画を阻止する方法は、二つ。一つは、アーサー王にこのことを知らせ兵士の派遣をやめさせるか、反逆の首謀者を割り出し逮捕すること。もう一つは、俺たちが直接反逆の首謀者の首を取ること。

俺たちは“ルシフェル”のリーダーを知らない。となれば、できることは一つに絞られる。

「アネラスさん」俺は彼女を抱え起こした。「一旦うちのギルドで面倒を見ます。ついてきてください」

彼女は一瞬躊躇いを見せたが、賢い彼女は、首を縦に振った。

フェダーに事情を話し、アネラスの保護と近辺のギルドへ応援要請を頼んでもらった。その間、俺とアリスは城へと向かった。目的はただ一つ。アーサー王に直接このことを伝えること。犯人の全体像がつかめない今、騎士団の誰かを頼るわけにはいかない。

「まったく、泣けてくるね」クーリッジは車を走らせながら、一連の事情について涙を流した。「青春してんなあ、おい！」

「青春がこんなに危険だったら今頃人口は半減してますよ」
「まあ、そうだな」豪快な笑いが車内を包む。

帝都へと直接つながる道を全速力で進む。おそらく“ルシフェル”も俺たちがこのようなアクションを起こすことについては計算済みだろう。何らかの妨害を加えてくるのは間違いない。

「さあ、着いたぜ」

眼前に聳え立つ城を見上げ、俺達は深呼吸をした。これからすることは、1000万人の命運を変えかねない一大事だ。

「ところでアリス、お前“グラビティ・ジャンプ無重力跳躍”出来るのか？」

「……何それ？」

「スーパーマンがたまにする人間を超越したジャンプのこと」

「……ああ……うん？」

ピンと来ていないアリスのために実技を見せて見せる。跳躍の瞬間に重力魔法“ゼロ・バインド”を足元に、瞬間的に発動させ、一気にビルの屋上まで飛び上がる。着地時も同様に、足元にその魔法を発動させ、着地時の衝撃を削る。

「あー、そうだ」着地と同時に、クーリッジは何かを思い出したらしく、車のトランクをおもむろに開け始めた。「こいつを預かってんだ」

ほい、と渡された靴は、底に不思議な加工がしてあった。練成魔
方陣が練られている。これは……。

「ロード工房の最新作、アクセル・ギア加速捻子搭載の反重力ブーツだ。高かった
らしいぞー、これ」

アリスは早速、靴をはいた。それをみて、仕方なく俺も靴を履く
ことにした。

「おっ……?」

足が、軽い。まるで羽が生えたかのように、軽い。

グラビティ・ジャンプ「無重力跳躍が誰でも手軽にできるようになりました、ってことだ」

これならアリスでも簡単に出来そうだ。わざわざ背負って上まで
登らずに済む。

「さて、早速……」

ロッククライミングならぬ、キャッスルクライミングの始まりだ。
軽く助走を着け、いつもと同じように跳躍をする。途端足元が薄
らと青く光り、何かが始動する音がした。

「うおっ!」

自動助力装置付らしく、勢い余って空中で一回転してしまった。

慌てて体勢を立て直し、壁に止まる。

「それ、どうやってやるの?」

城の出っ張りに足を置くアリスが、興味深げに聞いてきた。

「簡単だ。重力魔法“グラビティ”を手の平に発動させて、壁と手
とを重力で引き合わせればいい。それぐらいは流石にお前でも出来
るだろ?」

元々この魔法は魔法学校等でも基本として扱われるレベルの魔法
だ。弱い魔力でも十分だし、何より低コストなので子供でも十分扱
える。

「……あ、できた」

早速言われたとおりアリスは手の平の先にグラビティを放ち、
壁と手を引き合わせた。

「解除は、言わなくても分かるな?」

アリスの手がふわりと壁から離れる。覚えの良い子だ。

「あの明かりのついている窓を指すぞ、アリス」

そういつて俺は真上に飛び上がる。時々アリスの手助けをしながら、着実に上に登って行く。10分ほど登った結果、ようやくその場所にたどり着いた。

「ちよつと退けてる」

窓枠に手を触れ、ほんの少し力を込める。たちまち窓枠は消え、ついでに窓ガラスも無くなった。

「ねー、それどうやってやってるの？」開いた空間から中に割り込む。

「秘密だ、トップのな」

アリスはただ首をかしげるだけだった。

「……なにやら騒がしいな、城下は」

使いと共に室内に現れたのは、この帝都を治める王・アーサー本人だった。普段は見ることの無いラフな格好をしている。

「そうでございますね、陛下」

使いはそれから一式を部屋に置き、そそくさと室内から消えていった。

俺とアリスはそれを完全に確認した後、クローゼットから出た。

「よ、陛下」

「……やはりお前だったか」

「気づいてたか、流石だな」

アーサーは、きよとんとしているアリスとごく普通に立つ俺に対して、優しく微笑んだ。

「お前の頼みなら、こそこそしなくたって構わないのに」

「そういう訳にはいきそうにも無いんだよ、今回は」

その言葉を聞いて、彼女の顔つきが変わった。普段俺たちに見せ

るのと同じ、まっすぐな眼差し。

「……………どうということだ？」

「“ルシフェル”っていう反逆者達がいよいよ本格的に動き出した。直にあんたの首を取りに来るだろう」

それで、と俺は続ける。

「まずは城の警備強化に重点を置いてくれ」

その言葉に、彼女は顔を曇らせた。

「そうしたのは山々なんだが」

「べにろりのつき紅瑠璃杯”の盗難も奴らの仕業だ」

彼女は驚いた表情を見せた。

「それをどこで」

「色々、もう動いているんだよ」アリスが誇らしげに口を挟む。「王様の知らないところだね」

アーサーは唇をかみ締めた。

「……………？ おい……………ッ！」

彼女は突然衣服を脱ぎ捨て、先ほどのクローゼットにしまわれていた正装に着替えた。俺たちの目の前で。それからアリスに髪を整えるのを手伝ってもらい、いつもの王の姿に戻った。

「協力してくれ、レクエス」王は凜とした瞳を、俺に向けた。

「馬鹿が、誰に言っただ」不敵な微笑みを携え、瞳をみ返す。「言われなくてもしてやるつもりだよ」

フフ、と彼女は嬉しそうに微笑んでから、アーサーは俺とアリスを連れて円卓の間へと向かった。途中途中兵士に呼び止められたが、そのたびにアーサー自ら、彼らを宥めた。

円卓の間に集まった執政官諸々たちは、俺が告げた事実には動揺を隠し切れないようで、恐持ての屈強な武官でさえうろたえていた。夜明けの頃合とは思えないほどに、沈んだ空気が場を包んだ。

それを肌で感じ取った王は、部下達を一喝し、国の上に立つものがそれでどうする、ともつともらしいことを述べた。

「今すべきことは何か。奴らが動き出している以上、戦場になるのは間違いなく城下だ」

そう言つて彼女は、壁に付けられたホワイトボードに、これからすることを箇条書きにしていった。

まず始めに、住民の避難。犠牲になるのは私だけでよいと、彼女は言い切った。

次に、城の警備。この城は諸外国の外交官も滞在している。彼らを巻き込むわけには行かない。

3つ目は、犯人の特定。無差別にそれらしき人物を逮捕するわけにはいかない。証拠を集めて、誰が主犯格であるかを探さす必要がある。

俺たちギルドは、そのネットワークを生かして犯人を捜して欲しいと頼まれた。しかし俺に頼まれても、俺には権利が無いため、クーリツジを介してフェダーと連絡を取り、その旨を伝えた。彼は一瞬の沈黙の後、射る者シルフィードの動員に関しては許可を出した。それ以外のギルドについては、上層部に尋ねないと分からないとし、後々報告すると告げて電話を切った。

「そうか、分かった。」アリスは立ち上がり、よく通る声を室内に響かせる。「これで会議は終了だ。全員、先ほど指定した役割を遂行してくれ！」

頼もしいリーダーとして皆から指示されている理由がなんとなく分かった気がする。あれほどバラバラだったお役人達も会議が終わってみれば、きちんと自分の役割を遂行している。

「お前も成長したんだな」アリスを連れて、役人達と一緒に廊下に出る。

「……当然だ。あれからこれだけ時間が経つたんだ」

彼女は、悲しげにうつむいた。安心しろ、もうお前はあの時の弱いお前じゃない、と俺は彼女を励ましてから、長い廊下を再び進み

始めた。

次の夜が明けるとき、全ては変わるだろう。それは推測ではない。決められた確定事項だ。

一旦眠そうなアリスを寝かせ、一人情報収集へと向かった。向かう場所はただ一つ、ルクシエの下へ。

「貴様がレクエスだな？」

黒い紋章が目につく騎士二人組みに行く手をふさがれた。恐らくは……。

「仕事が速いね、ルシフェルの方々は」懐にある刀を鞘から抜き、片手で構える。「感心しちゃうよ、ほんと」

「そこまで知っているのなら話しは早い……覚悟してもらおうぞ」騎士は剣を構える。基本の姿勢だ。素人ではないようだ……。

相手の出方を伺っているほどの猶予はない。俺はその場から一気に騎士との間合いを詰めると、開いた左手で左側に立つ騎士の襟を掴み、反対側に立つ騎士へ向かって投げつける。狙い通り、騎士は二人ともぶつかりよろめいた。追撃も可能ではあったが、なにぶん急いでいる身だ。いちいち構っていられない。

「……ッ！ 待て！」

踵を返し、屋根の上へ飛び乗る。奴らがこちらへ来れないことを確認してから、屋根と言う屋根を飛び越えていく。いつもは心地よく感じられる風も、今日ばかりは血生臭い。

いくつかの屋根を飛び越え、蒼十字騎士団の事務所前に降り立った。案の定、奴らの追っては未だ来ていない。そして、都合よく目の前の扉は開いている。

「……ああ、あんたか」扉を開けたときに、正面に居たのはルクシエだった。前見た時と変わらない姿で、コーヒートをたしなんている。

「何も言わなくていい。事情は知っている」

ルクシエは手元の剣を持ち、俺を引き連れて外へ出た。そして何も言わず、どこかへ向けて歩き出す。

「どこへ行くつもりだ」

「決まっている。首謀者の所へだ」妙に自身ありげに、ルクシエは言い切った。

「なんだ、もう分かっているのか」

「ま、こちらな長いんでな。大方の見当はつくんだよ」

そう言ったルクシエの瞳は、言葉の調子と打って変わって物寂しげに見えなくも無い。

「そうでないことを、祈りたいよ……全く」

押し殺されながらも飛び出した彼の嘆きは、俺の心の中に静かに積もる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5728y/>

Re: -right-

2011年11月17日03時24分発行